

援助職のリカバリ

《9》

～一年に一度の実家・元旦～

袴田 洋子

元旦。一年に一度、実家に帰らなければならぬ日。面倒くさい。煩わしい。帰ったって、何をするわけではない。既製品のおせち料理と正月用の刺身の盛り合わせ、母親の手作りの煮物を食べながら、ビールを飲む。テレビで恒例のスポーツ番組を見ながら、というよりは、BGM 代わりにテレビをつけ、2 時間くらいの時が流れるのを待つ。母親は、台所と部屋を行ったり来たりしながら、料理や酒を運ぶ。私の夫は、私の父親に親切に酌をする。そのうち、父親はビールから熱燗に変わる。夫も燗を飲み始める。

「もっと早く来い。なんだってこんな時間なんだ。来るのが遅いんだ。」と父親は文句を言う。私は曖昧に笑って、父親の言葉を受け流す。来たくて来てるんじゃない。来なくちゃ文句言われるから来てるんだ。本当は来たくないんです。来たくないんです。と、心の中で幾度も繰り返した言葉を再び繰り返して、早く時が進んでくれと思う。同時に、どうしてこういう言い方しかできないんだろう、この人は、と、未練がましく思う。

そんな元旦とは、そろそろおさらばしようと思って、今年は意識改革を試みる。実家で過ごす元旦の時を、楽しく過ごしてみようとする。その証拠に、今年は、実家で自分が呑むための酒も買った。

元旦の日、実家に行く時は、手ぶらでは行かないようにしている。毎年、年賀用の日本酒を買って行くのだが、今年は道中、開いている店を探して買うのに時間を食った。そのため、もう少し早く実家に到着できたはずだったが、17 時過ぎに着く。あなたへの贈り物の日本酒を買うために、到着が遅くなったの。あなたに少しでも喜んでほしいと思うから、いつも日本酒を買っていくの。でも、毎年、父親は年賀の酒を飲まない。「酒は、秋田の爛漫。この酒はなかなか、ここらへんでは売ってないんだ。〇〇という店で、ほんとに珍しく、瓶の爛漫が売っていた。」と言いながら、父親はお気に入りの爛漫を燗で飲む。私は、面接の相槌のような「へえー」を言いながら、到着してから何分経ただろう、と時の経過を測る。爛漫を買って持って行った頃もあるが、確か母親から「うちで（ちゃんと

買って) あるから、買って来てくれなくていいよ」と言われて多分買わなくなった。なのに、なぜ買っていくのだろう。喜ばれない食料品は持って行かないほうがよいのだ。きっと。

父親は 82 才。昭和 6 年生まれ。立派なお爺さんの年齢。だから今年は、少し早めに実家に到着しようと思った。実際、今までで一番早く到着する。でも、父親は「もっと早く来い。なんでこんなに遅いんだ。だから、俺は機嫌が悪い。」と繰り返し言う。不器用な人なのだと思う。よく考えると、私の不器用さと瓜二つ。げんなりする。

今年は、実家用の酒だけでなく、元旦の実家を楽しく過ごせるようにと自分用のハイボールのためにサントリーの角瓶と炭酸ソーダ、ロックアイスも買った。父親の文句を聞きながら、最初の一杯のコップのビールが空になる。もっとビール呑むか、と父親から聞かれて、「ハイボールを呑む。ウイスキーを買って来たから。」と私は答える。「生意気に。ウイスキーだって？ハイボール？ 昔、呑んだな。」と上機嫌で父親が言う。夫は、爛を手酌し、父親の話に相槌をうちながら聞いている。道中買った年賀用の日本酒は、高清水。これも秋田の日本酒。秋田出身の父親が少しは喜ぶかと期待したが、やはり爛漫以外はだめなのだ。

私は、自分のハイボールを呑み終えないうちに、「そんなに、爛漫って美味しいの？」と、小さいコップを台所の茶箆筥から持って来て、爛漫を注ぎ、一口呑む。確かに美味しい。呑みやすい。水のように呑めてしまう。危険な酒だ。「高清水って、どんな味なの。」と独り言のように言

いながら、もう一つ、小さなコップを台所から持って来て、高清水の封を開け、手酌で呑む。親父、あんたが呑まないなら、あたしが自分で呑むまでだ。秋田の高清水。辛口の日本酒だ。喉ごしが、ちりりとする。不味くはない。

酒のつまみが無かった時、私が塩を舐めて日本酒を呑んだ話を夫が父親にする。「ちゃんと食べながら呑まないダメだ。酒だけじゃダメだ。」と酒の飲み方を父親が私に教える。これまでの人生の中で、父親に教えてもらったことって、もしかして無いかも。これ、初めてかもしれない。父親から初めて教わる事柄が、酒の呑み方とはなあ、とぼんやり思いながら、高清水を呑む。辛口の日本酒。くそ、どうせ呑まないのなら、持って帰ってやるか。でも荷物になるから、持って帰らないぞ。ちくしょう。あたしが買って来た酒を呑みやがれ。くそ親父。

「そうか、そうか、お前がこんなに酒を呑めるとはなあ。いいぞ、もっと呑め。もっともっと呑め。」と父親は喜ぶ。1日6km歩いている。75才まで大工職人。すぐかっとなって怒鳴る。恐ろしかった。それが、老人になっている。耳も遠い。でも、1日6kmも歩いているとは、介護予防の星だ。「魚も肉も、すごい食べるもん。」と母親が言う。杉並区桃井2丁目圏域の地域包括支援センター様。うちの親父を取材してください。

父親も、私も、夫も酔っぱらってくる。去年の10月の母方の祖母の13回忌、祖父の17回忌の法事の写真を見ながら、伯父、伯母や従姉妹たちの近況を聞く。私は大学院の講義があり、行かなかった。

母親のきょうだいは私から見れば仲が良く、昔はしばしば、母親たち兄妹、皆でそろって、老人ホームに入所している祖母の面会に行っていた。私も子どもの頃は、夏休みや冬休みのたびに、従姉妹の家に泊まりに行った。写真で従弟たちの姿を見ながら、立派なおじさんになったなあと思う。他愛も無い話をしていることに感動し、涙が出て来る。慌ててトイレに行く。

酔って饒舌になってきた父親が、筋肉が落ち、やせてぶかぶかになって履けなくなったスラックスを私の夫に「きっと履けるよな。」と、押し売りしている。デザインもへったくれもない。あまりの無遠慮さに腹が立って、「要りません。お気持ちだけでけっこうです。」と酔った勢いも借りて、私は言い放つ。脊髄反射のごとく「やかましい！」と父親は私を怒鳴りつける。ひゅっと、冷水を浴びせられたように、体の中の何かが凍てつく。ああ、この人は、こういう人だった、と思い出す。身長 180cm の夫に父親のスラックスの丈が合うはずはなく、「丈が合わないわよ。無理よ、おとうさん。」と母親が言う。頭にきて、私はトイレに行く。「まったく、良く似てる父娘よねえ。」と母親が夫に言う。「ほんとほんと。」と背後で夫が調子を合わせる。本当に父親にそっくり。DNA って恨めしい。遺伝子組み換え、人間でできないものか。

「お前、学校に行っているんだって？ 看護大学じゃ足りないのか。まったく何を勉強してんのか知らんが。」と、私が大学院に行っていることに父親が文句を言う。私はぼんやりとコップの中の高清水を見る。夫が「同じ大工でも、宮大工をするなら、その勉強が要るでしょう、それと同じですよ。」と父親に解説する。何も言

わない父親。コップの中の高清水を眺めたまま、父親がどんな表情をしているのか私はわからない。なぜ、この人は、もっと違うことを言えないのだろう。なぜ、この人は、こういうことしか言えないのだろう。なぜ、この人は、この人は、この人は。何かのはじけて、ふわふわと落ちていく。

「なんで、勉強、がんばれよとか、そういう事、子どもに向かって言えないのよ」と酒の力を借りて言ってやりたい衝動に駆られる。言ったらどうなるだろう。「うるさい！俺がどんだけ苦労して大学に行かせたと思っているんだ！」とか、「お前を学校に行かせるのに、歯医者に行くのも我慢してたんだぞ！」とか、そういうたぐいの台詞が倍返しのごとく来るだろう。さすがに夫には、あまり見せたくない。

以前、父方の親戚の家で、従弟の兄弟同士の殴り合いが起こった。その時、室内に漂った緊張感と虚無感は、実に独特なものだった。ドラマではないことを確認しながら、ひっくり返った皿やビールを片付ける。幕を下ろすために、どちらかが退場する。修復は、予想外に困難なものになることもある。元旦からそんなことをする気には、さすがになれない。従兄のおにちゃん退場後、たしかそのまま家には戻らず、ホームレスになっていたようで、数年後、公園のトイレで亡くなっていたと警察から連絡が来たらしいと、母親から聞いた。

父親の生育歴を詳しくは知らない。ずいぶん前に、北海道の開拓に行ったと聞いた。その時、「寒くてなあ。本当に寒くて。当時のことはもうあまり思い出したくない」と言っていた。同じ年齢の利用者は数名いる。戦中、戦後、「食べ

物がなくて、ひもじくて」とよく聞く。「天皇は、神様と同じなんだ」と言う父親にとって、勉強というものは、別世界に属していることなのかもしれない。

「しかし、おとうさん、去年とぜんぜん変わらないね。驚いた。」父親が子どものように喜ぶ。「ほんとか？ そうか？ 驚いたか？」と、繰り返し喜ぶ。この人は、褒められたいのか。この人も、褒められたいのか。「まだまだ、死にそうにないね。」と一応褒め言葉のつもりで言う。わずかな毒を嗅ぎ取ったのか、「死なないよ、まだ」と父親が言う。「もう 82 才にもなって、いつ死んでもおかしくないと思う。でも、やっぱ人間は、生きたいんだよ。」と言うので、驚く。こんなことを言うのか、親父。

「お雑煮、食べる？」と母親が言う。「いや、私は要らない。」「何だ、お前、せっかくうちのお母ちゃんが一生懸命作ったものを、何で食べないんだ。」と父親が言う。「はい、じゃあ、おつゆだけ。お餅は要りません」と私は言う。夫は餅入り雑煮を食べ、帰り道、駅のトイレで吐いた。

実家で呑みながら、ツイッターや Facebook に私は実況中継する。「こんなに楽しんでいる実家での正月は初めて」とつぶやく。だが、宴の後、親にいまだに何かを期待している自分に気付く。気付いて、喪失という言葉が再び脳内をふわふわする。

と、元旦の夜を思い出して書いていると、そもそも、噛み合っていない。夕飯を食べる、ということだから、夕方行けばよいと思っている

私だが、親父はもっと早くに私たちに来てほしい。では、来年は、もっと昼間のうちに到着して、真っ昼間から呑んでくれていればいいのか。でも、何も話すことが無い。正確に言えば、話すことはいくらでもある。でも、話をしてもケチをつけられるだけだから、話す気にならない。うちの母親はすごい。そういう父親と、もう 50 年も一緒にいる。

「正月に親子で賑やかで楽しい時を過ごした」という話には、胸が焼け付くような思いがする。こんな年齢にもなって、なぜ親との愛着を求めるのだろう。滑稽じゃないか。相手は 82 才。相手の変化を求めるよりは、自分の変化を起こした方が、手っ取り早いだろう。「ケチをつけることでしか愛情を表せない人」という脳内変換が、自動的に行えるようになればいい。いちいち引っかからずに、流しそうめんて流れてくる麺のように、するするすると脳内変換されればいいのだ。するするすると。

あるいは、一年に一回、元旦だけ、というシステムを変えれば、何かが変わるのだろうか。一年に三回、にすれば、ケチをつけられないシステムに変わるだろうか。そこで、損得勘定が働く。私がしてもらえなかったことを、なぜ私が彼らにしてあげなければならぬのか。途端に理不尽な思いが沸き起こる。人間も、野生動物のように、成長した後、親子の関係性が無くなってしまえば楽なのに。

正月、夫は自身の実家に電話をする。端から聞いていると、相手は友達か誰かのように聞こえる。こういう家族もある。私のような家族もある。不平等さと理不尽さと共に、また一年が始まった。